



Title	ソヴィエト・クルグズスタンの形成：クルグズ人政治エリートの民族主義の登場とその展開
Author(s)	ベクトゥルスノフ, ミルラン
Citation	スラヴ研究, 66, 25-53
Issue Date	2019-09-10
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/84270">http://hdl.handle.net/2115/84270</a>
Type	bulletin (article)
File Information	66_02_Mirlan.pdf



[Instructions for use](#)

# ソヴィエト・クルグズスタンの形成

—— クルグズ人政治エリートの民族主義の登場とその展開 ——

ミルラン・ベクトウルスノフ

## はじめに

ソヴィエト領中央アジアにおける民族共和国の形成に関する近年の先行研究では、これらの諸共和国の形成過程を民族エリートの動向から論じる場合が多い<sup>(1)</sup>。ソヴィエト政権の枠内での民族共和国の形成問題を考察する際に主に中央政権側を中心に分析する傾向から脱し、この問題に現地の視点を入れるためである。とりわけ、現地人エリートが各民族共和国・自治州の形成の必要性を議論し、民族領域の画定を交渉する際、中央政権に積極的に働きかけたことが明らかになっている。つまり、彼らはモスクワで作られた民族政策の消極的な受容者ではなく、制度と国家づくりの過程において重要な役割を果たしたと考えられるようになってきている<sup>(2)</sup>。

ソヴィエト・クルグズスタン<sup>(3)</sup>も中央政権と現地人エリートの交渉の結果形成された民族自治州の典型的な例である。帝政ロシアの少数民族に自治運動の機会を開いた2月革命によって、トルキスタンやカザフ草原でも民族知識人による自治運動が活発化した。これらの民族知識人は、多くの場合、ウズベク人やカザフ人など帝政末期から知識人層が育成されていた諸民族の間から出た活動家たちであり、近代的知識人の育成が遅れたクルグズ人の間ではロシア革命期・内戦期に自治運動は現れなかった。しかし、内戦が終結し、情勢が落ち着いて1922年に初めて現れたクルグズ人エリートの民族主義は、以降ソヴィエト政権の枠組

1 Arne Haugen, *The Establishment of National Republics in Soviet Central Asia* (Basingstoke: Palgrave Macmillan UK, 2003); Adrienne L. Edgar, *Tribal Nation: The Making of Soviet Turkmenistan* (Princeton: Princeton University Press, 2004); Adeeb Khalid, *Making Uzbekistan: Nation, Empire, and Revolution in the Early USSR* (Ithaca: Cornell University Press, 2015); Paul Bergne, *The Birth of Tajikistan: National Identity and the Origins of the Republic* (London: I.B.Tauris, 2007); Steven Sabol, "The Creation of Soviet Central Asia: The 1924 National Delimitation," *Central Asian Survey* 14, no. 2 (1995), pp. 225-241; Аманжолова Д. А. Казахский автономизм и Россия: история движения Алаш. Москва, 1994; Аманжолова. Казахская автономия: от замысла националов к самоопределению по-советски // *Acta Slavica Iaponica*. 2004. № 21. С. 115-143.

2 Edgar, *Tribal Nation*, p. 5.

3 正式には「ソヴィエト・クルグズスタン」という名称は存在しないが、本論で言及する「ソヴィエト・クルグズスタン」とは、1922年に提案されたものの設立されなかった山岳カラ・クルグズ州を含め、1924年に宣言されたカラ・クルグズ自治州及び1926年に自治共和国に昇格されたクルグズ自治ソヴィエト社会主義共和国と、1936年に連邦構成共和国となったクルグズ・ソヴィエト社会主義共和国、つまりソヴィエト政権下においてクルグズ人を基幹民族とする政治・行政単位を総称した名前である。

みで自治を要求し続け、最終的に 1924 年の中央アジア民族・共和国境界画定<sup>(4)</sup>の際に民族行政単位を獲得する。同年、中央政権が従来の考え方に沿って境界画定を 3 つの主要民族（ウズベク、カザフ、トルクメン）の間で行う計画を提示すると、カラ・カルパク人とクルグズ人が反発し、中央アジアは 3 つの民族ではなく、タジク人を含んだ 6 つの民族から構成されていることを指摘し、自らの存在感を示したのである<sup>(5)</sup>。このように 1924 年の秋に宣言されたカラ・クルグズ自治州の形成は、当初の計画になかった現地の視点が中央政権の政策に反映された一つの例だと言える。

カラ・クルグズ自治州の形成におけるクルグズ人エリートの役割を肯定的に評価する傾向はソ連崩壊後の現象である。全ての物事が共産党か国家指導者を中心に語られ、イデオロギー的制約下にあったソ連期の歴史学では一般的に現地人エリートの役割を論じることは少なかった。ただし、彼らがいかに「ブルジョワ的民族主義者」あるいは「農民労働者の搾取者」だったのかを示す際には具体的に名前が挙げられる場合があった。したがって 1922 年に山岳カラ・クルグズ州の設立を試みたアブドゥケリム・スドゥコフ（1889-1938）やイシェナル・アラバエフ（1881-1933）らの政治活動家の行動は、クルグズ人農民労働者を従来通りクルグズ社会の支配層、マナブ（部族首領）層の影響下に引き止めようとしたと解釈された<sup>(6)</sup>。ソ連期のクルグズ歴史学にとってのソヴィエト・クルグズスタンの形成は、ソ連共産党や国家指導者、あるいはソヴィエト大会の決議に反映された大衆の意志決定で進められたものである。このような見方はクルグズスタン独立後の民族主義の高揚を背景に大きく転換し、今度は共産党や国家指導者などではなく、当時のクルグズ人エリートこそがクルグズ人の自治の考案者であり、彼らがソヴィエト・クルグズスタンならびに現クルグズ共和国の創設者と描かれるようになった<sup>(7)</sup>。

歴史叙述のこのような両極端の間を縮小させようとしたのはベンジャミン・ローリングとジパル・ドゥイシヨムビエヴァの研究である<sup>(8)</sup>。ローリングの研究は、現地の文書館の史料

4 中央アジア境界画定については、Haugen, *The Establishment*; Sabol, “The Creation of Soviet Central Asia”; 熊倉潤「民族自決と連邦制：ソ連中央アジア地域の国家建設（1923-1924年）」『ロシア史研究』94号、2014年、3-21頁。熊倉潤「民族自決の帝国：ソ連中央アジアの成立と展開」『国家学会雑誌』125巻1・2号、2012年、41-104頁。

5 Haugen, *The Establishment*, 特に第7章。

6 Погорельский П., Батраков В. Экономика кочевого аула Киргизстана. Москва, 1930. С. 197; Зорин А. Н. Революционное движение Киргизии (северная часть). Фрунзе, 1931. С. 43-45; Джунушев А. Из истории образования Киргизской автономной республики. Фрунзе, 1966. С. 31.

7 Ожукеева Т. О. 20-й век: возрождение национальной государственности в Кыргызстане. Бишкек, 1993; Плоских В. М. Манас не признал себя виновным. Бишкек, 1993; Курманов З. К. Политическая борьба в Кыргызстане в 20-е годы. Бишкек, 1997; Курманов. Национальная интеллигенция 20-30-х годов: вклад в возрождение государственности кыргызского народа и борьбу с тоталитарно-авторитарным режимом. Бишкек, 2005; Джунушалиев Дж. Время созидания и трагедии. 20-30-е годы 20 века. Бишкек, 2003.

8 Benjamin H. Loring, “Building Socialism in Kyrgyzstan: Nation-Making, Rural Development, and Social Change, 1921-1932” (Ph.D. diss., Brandeis University, 2008); Jipar Duissembieva, “Visions of Community: Literary Culture and Social Change among the Northern Kyrgyz, 1856-1924” (PhD diss., University of Washington, 2015).

を中心に論じてきたクルグズ人研究者と異なり、ソヴィエト・クルグズスタンの形成問題に初めて中央政権側が作成した一次史料を紹介した点で評価される。彼は、ソヴィエト・クルグズスタンの形成に伴った重要な政治的出来事を分析し、現地レベルでの動向を中央政権がいかに受け止め、どのような対抗措置を取ったのかを整理した<sup>(9)</sup>。換言すれば、ローリングもソヴィエト・クルグズスタンの形成に現地人エリートの民族主義的要求が深く関わっており、彼らの自治運動が最終的にクルグズ人の行政単位の設置を実現させたと論じている。

他方でドゥイシェムビエヴァは、ローリングの方法論に歴史的文脈が不足していることを批判して、ソヴィエト期初期にクルグズ人の民族主義が出現し、彼らが自治を要求するようになる起源をロシア帝政末期の文化・政治環境に見ている<sup>(10)</sup>。彼女によればクルグズ人エリートは、ロシアの他のムスリム地域の近代知識人と同様に帝国の様々な教育機関や国外への留学を経て、同時代の近代主義から影響を受けていた<sup>(11)</sup>。文字文化が遅れていたクルグズ社会で口承文化の影響下で育ったこれらの知識人は、帝政末期の時点でクルグズ人としてのアイデンティティを持っていた。ソヴィエト政権に入るとそれは急速に政治的意味合いを持つようになり、クルグズ人エリートの自治要求に繋がったとされる。

本稿では従来の研究が前提にしてきた一次史料の再検討を目的とし、課題として三点を設定する。第一に、ソヴィエト・クルグズスタンの形成に関する研究の多くは、ソ連末期や独立直後に出版された第一波の諸研究に強く依存しており、これらの諸研究が作った民族主義的視角を克服することができなかった<sup>(12)</sup>。欧米や日本などの方法論を取り入れているローリングとドゥイショムビエヴァも、独立直後の民族主義の高揚を背景に出された諸研究の一次史料を無批判に参照した点で、第一波の先行研究の見方から脱していないと言える。例えば、第一波の研究者は1922年に登場した山岳カラ・クルグズ州に関して当時のクルグズ人エリートの反カザフ人的な態度を主張する一方、トルキスタン自治共和国<sup>(13)</sup>の権力機関にいたカザフ人活動家が山岳州の形成を支持していたことを読み取れなかった<sup>(14)</sup>。本稿の第1節で示す

9 Loring, "Building Socialism in Kyrgyzstan," pp. 74-95.

10 Duishembieva, "Visions of Community," p. 7.

11 Ibid., p. 134.

12 ソ連末期や独立直後の研究は最初に新聞・雑誌の記事として登場した。Семенов И. Трайбализм: 20-е годы // Литературный Кыргызстан. 1988. № 5; Семенов. На пути к суверенитету // Слово Кыргызстана: В конце недели. 29 февраля; 7, 14 марта 1992; Джунушалиев. Истоки «белых» пятен истории // Коммунист Киргизстана. 1990. № 5; Джунушалиев. Уроки прошлого... // Пропагандист и агитатор Кыргызстана. 1989. № 21; 後に出版された論文集や文献は、これらの記事が参照した一次史料に基づいている。Курманов З., Плоских В. М., Бегалиев С., и др. Абдыкерим Сыдыков – национальный лидер. Бишкек, 1992; Ожукеева. 20-й век; Джуманалиев А. Политическое развитие Кыргызстана (20-30-е годы). Бишкек, 1994; Койчиев Т. К., Плоских В. М., Усубалиев Т. У. У истоков кыргызской национальной государственности. Бишкек, 1996; Курманов. Политическая борьба в Кыргызстане; Джунушалиев. Время созидания и трагедии; Абдрахманов Ю. 1916. Дневники. Письма к Сталину. Бишкек, 2012.

13 トルキスタン自治ソヴィエト社会主義共和国は1918年5月1日に宣言され、1924年に中央アジア民族・共和国境界画定の結果として解体された。

14 山岳州の形成は当時のカザフ自治ソヴィエト社会主義共和国の領土拡大へのクルグズ人エリートの反応であり、それは全体的に反カザフ人感情につながったと言うのが先行研究で定着した見方

ようにソヴィエト初期に初めて現れたクルグズ民族主義は当時の政治的文脈に強く依存しており、必ずしも先行研究で描かれるほど自立的なものではなかった。

第二に、同時代に展開されていた領土再編成とクルグズ人の自治運動がいかに関連していたのかという問題である。帝政ロシアの行政区画をそのまま遺産として引き継いだソヴィエト政権は、当初から国内の領域再編成を課題としており、行政区画を合理化するために経済的基準と民族的基準のどちらを基に領域再編成を実行すべきかを検討していた<sup>(15)</sup>。1916年の反乱<sup>(16)</sup>と、その後のロシア革命及び内戦期の厳しい状況により社会・経済的危機に直面していたトルキスタンの中で、セミレチエ州では特に状況が深刻だった。この深刻な危機を乗り越えるためにクルグズ人エリートは広大なセミレチエを2つに分割し、州の運営と管理を合理化することを訴えた。従来の研究では取り上げられなかったが、皮肉なことに、山岳州の形成はまさに経済的理由づけで行政区画再編成を担当するソ連国家計画委員会（ゴスプラン）の反対で実現しなかった。

第三は、先行研究ではソ連初期におけるソヴィエト・クルグズスタンの形成の最終的な過程が論じられなかったという点である。具体的にいうと、1924年に行われた中央アジア民族・共和国境界画定とカラ・クルグズ自治州の形成に関する諸問題である。クルグズ人研究者の間では1922年の山岳カラ・クルグズ州の問題が圧倒的に注目を浴びてきた反面、カラ・クルグズ自治州の形成の出発点となった中央アジア民族・共和国境界画定に関する問題は概括の域を出なかったため、ソヴィエト・クルグズスタンの形成の検討は部分的なものにとどまっていた<sup>(17)</sup>。他方、ドゥイシヨムビエヴァを含む近年の研究では境界画定とクルグズ人エリートの立場の問題が検討され始めている<sup>(18)</sup>。しかし、ドゥイシヨムビエヴァとローリング

---

である。Loring, “Building Socialism in Kyrgyzstan,” p. 76; Duissembieva, “Visions of Community,” p. 244; Курманов. Политическая борьба. С. 125.

- 15 Francine Hirsch, *Empire of Nations: Ethnographic Knowledge and the Making of the Soviet Union* (Ithaca and London: Cornell University Press, 2005), pp. 70-82; Francine Hirsch, “State and Evolution: Ethnographic Knowledge, Economic Expediency, and the Making of the USSR, 1917-1924,” in Jane Burbank, Mark von Hagen, and Anatolyi Remnev, eds., *Russian Empire: Space, People, Power, 1700-1930* (Bloomington: Indiana University Press, 2007), pp. 146-159.
- 16 1916年反乱とは、第一次世界大戦を戦っていたロシア帝国が人員不足のため、兵役を免除されていた中央アジアのムスリム諸民族から労役者を徴用する命令を出したことに反発して起きた反乱のことである。特にトルキスタン総督府のセミレチエ州で激しい反乱を起こしたクルグズ人とカザフ人が、衝突や鎮圧により大きな被害を受けた。政府の報復作戦に直面して、隣接する国中国領へ避難した人たちも数多くいた。2月革命が起きると中国領から帰郷する人たちが増えるが、ロシア臨時政府のコントロールが十分に及ばない地域では武装したヨーロッパ系農民たちの攻撃にさらされ、数多くの犠牲を払うことになる。Чеканинский И. В. Восстание киргиз-казаков и кара-киргиз в Джетисуйском (Семиреченском) крае в июле-сентябре 1916 года года (К материалам по истории этого восстания). Кызыл-Орда, 1926; Будянский Давид. История беженцев-кыргызов (1916-1927 годы). Бишкек, 2007.
- 17 これはソ連期と独立期の両方の先行研究について指摘できる問題であるが、特に独立後に関する原因としては、主にタシケントやモスクワの文書館に保管されている一次史料を独立後の経済危機に陥ったクルグズ人研究者は参照できなかったということが考えられる。
- 18 Duissembieva, “Visions of Community,” pp. 246-254; Loring, “Building Socialism in Kyrgyzstan,” pp. 89-95; Haugen, *The Establishment*, pp. 167-172.

は境界画定過程の初期段階における彼らの立場を分析する一方、カラ・クルグズ自治州の領域を定めた領土委員会の作業には言及していない。各民族間の領域を具体的に議論し、どの地域と集団がどの共和国に帰属するべきかを定めた領土委員会の作業は、クルグズ人エリートが考えていた自治のあり方を理解する上で重要である。境界画定過程に関する研究ではハウゲンがフェルガナ盆地の文脈でクルグズ側の視点を紹介しているが<sup>19)</sup>、1924年以前のクルグズ人知識人、政治活動家の動向を検討していないため彼の解釈も部分的に留まっている。特に、ハウゲンが山岳州の問題と境界画定におけるクルグズ人エリートの立場を比較していないことは、重要な欠点であろう。

以上のような問題意識と研究動向をふまえつつ、本稿では1917年から1924年にかけてソヴィエト・クルグズスタンの形成過程で生じた政治的出来事に焦点を当て、従来の研究で注目されなかった諸側面を取り入れたい。ソヴィエト初期におけるクルグズ民族主義は、時期ごとに異なった特徴と目的を持っており、特に当時の社会・政治的文脈に照らしながら読むとその複雑な性格が表れてくることを主張したい。ソヴィエト・クルグズスタンの形成は、先行研究で論じられるほどクルグズ人エリートの民族主義の圧力で中央政権が直ちに自治を供与したという直線的な過程ではなかった。クルグズ人の他民族集団との関係や同時代に全国レベルで行われていた国家政策の影響も、クルグズ民族主義の内容と方向に強い影響を残している。本稿の目的は、一次史料の再検討を通してソヴィエト初期におけるクルグズ人エリートの民族主義の時期ごとの動向を把握することと、これまで部分的にしか分析されなかったソヴィエト・クルグズスタンの形成過程を整理することである。

本稿の構成は以下の通りである。まず第1節では、帝政末期のクルグズ社会における近代知識人の登場と発展を整理し、つづく第2節ではソヴィエト初期におけるクルグズ人エリートの自治運動である山岳カラ・クルグズ州形成の試みと失敗の問題を検討する。そして第3節では1924年の中央アジア民族・共和国境界画定とクルグズ人活動家の立場を考察する。最後の第4節では、カラ・クルグズ自治州の領域を定めた領土委員会の作業に注目し、そこから見えてくるクルグズ人の自治構想の内実を明らかにしたい。

史料としては、クルグズ国内及びロシアとカザフスタンの公文書館が所蔵する全連邦共産党（ポリシェヴィキ）クルグズ州ビューローと中央アジア・ビューロー、そしてトルキスタン共産党セミレチエ州党委員会の史料ならびにクルグズ自治ソヴィエト社会主義共和国人民委員会議の史料を中心に用いる。これらの史料は上記で紹介してきた諸研究においても部分的に参照されてきたが、本稿ではそれらをまとめて再検討し、先行研究で扱われてこなかったクルグズ自治州党ビューローに関する史料も取り入れる。これらを補足するものとして、近年カザフスタンで出版されている同時代の新聞・雑誌などの記事をまとめた文献なども使用する。

---

19 Haugen, *The Establishment*, pp. 188-194; *Койчиев А. Национально-территориальное размежевание в Ферганской долине (1924–1927 гг.)*. Бишкек, 2001.

## 1. 帝政末期のクルグズ人エリート

1917年2月のロシア革命はロシア・ムスリムの間で自治運動を活性化させたが、クルグズ人の間では同様な自治運動を引き起こさなかった。その原因としては1916年反乱がもたらした社会経済的危機のほか、近代知識人の生成が遅れていたことが考えられる。だが、帝政末期にクルグズ人指導者の運動が全く現れなかったわけではない。

近代的教育を受けるためにクルグズ人の間からもロシア帝国の様々な都市へ向かう人たちがいた。ジャネク・スルタナエフはワルシャワ獣医大学、コジョムラト・サルクラコフ(1892-1918)はキエフ大学とカザン大学、そしてアブドゥケリム・ストゥコフ(1889-1938)はカザン獣医大学で教育を受けたことが知られている<sup>(20)</sup>。その他にイスラーム教育が盛んだったウファ市をはじめイスタンブル、メッカとメディナなどにも足を運び、知識を深めた人たちも現れ、その中で特にイシェナル・アラバエフ(1882-1933)が注目を集める人物の一人である。ロシア国外で教育を受けたかどうかは確認されていないが、クルグズ人の初の歴史家と言われるベレク・ソルトノエフ(1878-1937?)とオスモンアル・ストゥコフ(1875-1942)も当時の知識人として挙げられる。アラバエフは、1907年から留学に出発し、まずはイスタンブルで教育を受け、そしてメッカやメディナなどの教育機関を訪問した。その後、オレンブルグのフサイニエ・マドラサで知識を深めてから、ウファにある有名なガリエ・マドラサに入学した<sup>(21)</sup>。アラバエフの他にクルグズ人の部族有力者のケメル・シャブダノフ(サルバグシュ族のマナブ、シャブダン・ジャンタエフの息子)、イスハク・カナトフ(同じくカナト・アブキンの息子)、そしてナルンクル・アジエフもガリエ・マドラサを卒業したことが知られている<sup>(22)</sup>。

しかし、2月革命後になるとクルグズ人を代表する声がこれらの知識人の中からではなく、従来までクルグズ人研究者の間でも軽視されてきたトレクル・ジャヌザコフ(1893-1921)から現れた。ジャヌザコフは1893年にトルキスタン総督府のシルダリア州に帰属するアウリエ・アタ郡の一部だったタラス地域で生まれた。1909年にメルケ市のロシア語・現地語学校を卒業してからトルキスタン総督府で総督の通訳兼補佐として採用された<sup>(23)</sup>。メルケの学校ではカザフ人政治活動家のトゥラル・ルスクロフ(1894-1938)と共に教育を受け、それは1920年にルスクロフがトルキスタン中央執行委員会の委員長に就任した時にジャヌザコフが副委員長に登用されることにも関連したと考えられる。彼は、トルキスタン中央執行委員会の副委員長として、クルグズ人とカザフ人難民の問題に取り組む特別委員会の委員長に選ばれた<sup>(24)</sup>。後にバスマチ運動に参入し、トルキスタンの独立を目指す「トルキスタン民

20 *Курманов З.* Национальная интеллигенция 20-30 годов: вклад в возрождение государственности кыргызского народа и борьбу с тоталитарно-авторитарным режимом. Бишкек, 2005. С. 175, 40, 41.

21 ЦГА ПД КР, ф. 10, оп. 15, д. 188, л. 38 («Личное дело Ишеналы Арабаева»).

22 Jipar Duishembieva, “Visions of Community,” p. 147.

23 *Разаков Т. К.* вопросу о басмаческом движении // Вестник КРСУ. 2010. Т. 10. № 8. С. 97.

24 «Выписка из журнала заседания Президиума Турцика от 2 февраля 1920 года» in M. Q. Qoigeldiev, Sh. B. Tileubaev, R. E. Orazov, eds., *Qazaq ulti-azattik qozghalısı. Tom 2: Jetisu - İstik köl qasireti. Qıjattar men materialdar jinaghı* (Almatı: El-shejire, 2009), p. 318.

族統一」という地下活動にも繋がりを持つようになり、ソヴィエト政権から離れていく<sup>(25)</sup>。最終的に1921年にトルキスタン中央政権に特赦願を出したものの、承認されたかどうか分からないまま赤軍に逮捕され、その後、赤軍とバスマチの戦闘で射殺されたようである<sup>(26)</sup>。

ジャヌザコフは1917年にクルグズ人エリートを団結させようとし、クルグズ人大会を開こうと呼びかけた唯一の人である。彼は1917年末に予定されていたロシア憲法制定会議選挙に向けて、憲法制定会議にクルグズ人の代表者を送る問題を議論するためにトルキスタン地域のクルグズ人大会を開く必要があると指摘したが、この大会が開催されたかどうかは不明である<sup>(27)</sup>。ジャヌザコフのクルグズ人大会は、確認できる限り、革命期におけるクルグズ人による唯一の自治運動の試みとして知られている。

クルグズ人の本格的な民族主義的運動は1922年に入ってから始まる。ジャヌザコフの考えを部分的に引き継ぐクルグズ人大会は、1922年の6月1日から5日にかけてピシペクで「山岳州の勤労大衆の第一回予備大会」という名称で開かれた。大会の主催者の考えでは、トルキスタン自治ソヴィエト社会主義共和国の領域内に暮らす全てのクルグズ人を一つの州にまとめ、彼らの文化、経済的要求を満たし、発展する機会を与えるために山岳カラ・クルグズ州を設立する必要があった。次節では、上述のアブドゥケリム・スドゥコフやイシェナル・アラバエフらが先頭に立った山岳州の問題を詳しく検討する。

## 2. 山岳カラ・クルグズ州

山岳州の問題は1921年春、トルキスタン委員会<sup>(28)</sup>のメンバーだったゲオルギー・サファロフ(1891-1942)とトルキスタン中央執行委員会委員でカザフ人のスルタンベク・ホジャノフ(1894-1938)がアルマトゥ市(セミレチエ州の行政上の中心)を訪れた時には初めて取り上げられたと、同時代のクルグズ人政治活動家ユズプ・アブドゥラフマノフ(1901-1938)が書いている<sup>(29)</sup>。山岳州の設立に関するアブドゥラフマノフのこの報告書がいつ、どのような状況で書かれたかは確認されていないが、ポストソ連期のクルグズ人研究者は彼の報告書を主な一次史料として参照している。この時期、クルグズ人政治活動家のアブドゥケリム・スドゥコフはセミレチエ州執行委員会の委員長を務めており、要職へ登用された数少ないクルグズ人の一人だった。彼の登用は山岳州の問題と深く関係していると考えられる。山岳州に関する初めての決議は、1922年3月25日にトルキスタン共産党中央委員会書記局によってなされた。山岳州設立問題を具体的に誰が提起したのかはそれに関する一次史料が見つからないため正確にいうのが難しいが、スドゥコフによれば決議はトルキスタン中央執

25 *Разаков Т. К* вопросу. С. 98.

26 Там же. С. 100.

27 *Qoigeldiev et al., Qazaq ulti*, pp. 231-32, 236-39.

28 全ロシア中央執行委員会と人民委員会議が全権代表としてトルキスタンに送った委員会。

29 ЦГА КР (Центральный Государственный Архив Кыргызской Республики), ф. 21, оп. 6, д. 139, л. 169 (“Созыв съезда по образованию горной Кара-Киргизской области в Туркестанской Республике в 1922 г.”).

行委員会から出されたという<sup>(30)</sup>。しかし、アブドゥラフマノフはセミレチエ州執行委員会が山岳州設立に関する請願を出したことを確認できる史料を引用している<sup>(31)</sup>。

いずれにしてもトルキスタン自治共和国の要職にいたカザフ人が山岳州の問題を支持していたことは確かである。例えば、カザフ人のナジル・トレクロフ（1892-1937）が議長を務めたトルキスタン共産党中央委員会書記局の会議は、1922年3月25日に「セミレチエ州の再編成に関して」という決議で、「トルキスタン共和国の中に山岳州を設立する法令を下すように」とトルキスタン中央執行委員会に一任した<sup>(32)</sup>。それを受けてもう一人のカザフ人、スルタンベク・ホジャノフが副委員長を務めていたトルキスタン中央執行委員会は、3月26日に山岳州の設立を承認する決議を採択し、新しい州の領域に含まれる地域として、ピシベク郡、プルジェヴァリスク郡、ナルン郡、そしてアウリエ・アタ郡の山岳地帯を具体的に示した<sup>(33)</sup>。ただし、フェルガナ州のクルグズ人に関しては「状況が解決されるまで未決のままにしておく」と定められた<sup>(34)</sup>。同決議によってクルグズ人地域のソヴィエト大会を開くことも決められたほか、これからの具体的な組織作業をトルキスタン共産党セミレチエ州委員会とトルキスタン自治共和国内務人民委員部に委任する決定も出された。

ユスプ・アブドゥラフマノフによれば、これらの決定を踏まえてホジャノフはその後トルキスタン共産党セミレチエ州委員会と同州執行委員会にトルキスタン中央政権が採択した決議について通知し、予定されたクルグズ人ソヴィエト大会の準備作業に関する指示を出したようである<sup>(35)</sup>。4月19日にセミレチエ州党委員会と執行委員会の合同会議が開かれ、山岳州の設立大会を6月1日に開催することと、大会に向けて組織委員会を編成することが決定された。この組織委員会にはアブドゥケリム・スドゥコフとブリュハノフ、そしてウダラエフの3人が選出された。このように、山岳州の設立に関する請願は、スドゥコフが委員長を務めたセミレチエ州の執行委員会が提出し、カザフ人のトレクロフとホジャノフらが重要な役割を担っていたトルキスタン自治共和国の中央政権がそれを承認したことになる。

ホジャノフたちが山岳州の設立を支持した理由の一つは、1920年にオレンブルグを首都として形成されていたカザフ自治ソヴィエト社会主義共和国との関係にあった。当初ステップ地域から設立されたカザフ自治共和国（当時のロシア語名称はキルギズ共和国）は、トルキスタン自治共和国の管轄下にあった全てのカザフ人と、カザフ人に文化・生活様式の面から近い諸民族の居住地域の併合を求めている<sup>(36)</sup>。山岳州の問題が提起された時にトルキスタ

30 ЦГА ПД КР (Центральный государственный архив политической документации Кыргызской Республики), ф. 391, оп. 3, д. 56, л. 131 (“Стенографический отчет. Заседания общего собрания коммунистов Угоркома гор. Пишпек от 21 мая 1922 года”).

31 ЦГА КР, ф. 21, оп. 6, д. 139, л. 171 (“Созыв съезда по образованию горной Кара-Киргизской области в Туркестанской Республике в 1922 г.”).

32 ЦГА ПД КР, ф. 391, оп. 3, д. 61а, л. 6-7.

33 ЦГА ПД КР, ф. 391, оп. 3, д. 61а, л. 8.

34 フェルガナ州の状況とは、1920年代初頭を中心に中央アジアで起きた反ソヴィエト武力闘争であるバスマチ運動による混乱を指している。

35 ЦГА КР, ф. 21, оп. 6, д. 139, л. 171 (“Созыв съезда по образованию”).

36 カザフ自治共和国は1924年の中央アジア民族・共和国境界画定の時にもこれらの地域の移管を要求した。РГАСПИ, ф. 62, оп. 2, д. 101, л. 132.

ンの政治で大きな議論になっていたのも、カザフ自治共和国によるセミレチエ州とシルダリア州の要求の問題である。ホジャノフは、両州が最終的にカザフ自治共和国に編入され、カザフ人が一つの共和国内にまとまることを否定しなかったものの、現時点ではセミレチエ州とシルダリア州の移譲を時期尚早だと見ていた<sup>(37)</sup>。カザフ自治共和国は1921年末からモスクワの民族問題人民委員部を通じて両州の編入を積極的に訴えており、1922年3月と4月に中央政権内で全ての関係者を含んだ会議を開いて、議論を促進することに成功していた<sup>(38)</sup>。山岳カラ・クルグズ州の問題はこのような動向を背景にして取り上げられたと先行研究でよく指摘される。つまり、カザフ自治共和国がセミレチエ州とシルダリア州の移譲を求めてきた時に、両州の南部に居住していたクルグズ人がカザフ自治共和国に編入されることを恐れ、自らの自治問題を取り上げたという考えである。しかし、同時にトルキスタン政府の要職にいたカザフ人が山岳州を支持したことは簡単に触れられるだけで、十分に分析されなかった<sup>(39)</sup>。

この時期にトルキスタンの中央政府内にクルグズ人が一人もいなかったことや、スドゥコフ自身もセミレチエ州執行委員会の委員長に就任した直後だったことなどを考慮すると<sup>(40)</sup>、同時期にトルキスタンの政治舞台でかなりの影響力を持っていたカザフ人エリートが山岳州の設立を支持し、関わっていたことは想像するに難くない。ホジャノフ自身も、山岳州の発議者の一人だったことを2年後に明かしている。中央アジア民族・共和国境界画定の初期段階でクルグズ人の自治問題が議論になった際、「私はこの問題〔クルグズ人に自治を与える問題〕の反対者ではない、むしろかつて私はこの問題の発議者だった」と彼は述べた<sup>(41)</sup>。1924年以降反カザフ感情を抱くようになるユスフ・アブドゥラフマノフも上記の報告書で、ホジャノフがクルグズ人のソヴィエト大会の準備作業について指示を出し、重要な役割を担っていたことを証言している。山岳州の設立問題がトルキスタン中央政府内で円滑に議論され、障害なく採択されたことにホジャノフをはじめとするカザフ人が何らかの形で関わっていたことは、山岳州を設立する発議がトルキスタン中央執行委員会からあったとい

37 Sūltanbek Qojanov, *Shīgharmalari* (Almatī: Aris, 2009), pp. 16-22, 27-30. セミレチエ州とシルダリア州のカザフ自治共和国への移管にはホジャノフだけでなく、トルキスタン中央執行委員会の委員長アブドゥッラー・ラヒムバエフを始め多くのトルキスタン政治エリートが反対した。Совещание по вопросу о присоединении Семиреченской и Сыр-Дарьинской областей к Кирреспублике // Жизнь национальностей. 1922. № 6-7; К вопросу о присоединении Сыр-Дарьинской и Семиреченской областей к Кирреспублике // Жизнь национальностей. 1922. № 10.

38 Семенов И. На пути к суверенитету. Горная область: разрешение получено // Слово Кыргызстана. В конце недели. 07. 03. 1992; Совещание по вопросу о присоединении Семиреченской и Сыр-Дарьинской областей к Кирреспублике // Жизнь национальностей. 1922. № 6-7.

39 Курманов. Политическая борьба. С. 124; Джунушалиев. Время созидания и трагедии. С. 24; Loring, “Building Socialism in Kyrgyzstan,” p. 76; Duissembieva, “Visions of Community,” p. 244.

40 スドゥコフは1922年3月初めに委員長に就任した。

41 РГАСПИ (Российский государственный архив социально-политической истории), ф. 62, оп. 2, л. 101, л. 109.

ウストウコフの報告からも窺える。ホジャノフらはトルキスタンを歴史的に様々な民族集団が構成してきた一つの経済的共同体として見ており、1924年の境界画定の際に、トルキスタン自治共和国を解体して民族別の行政単位を設立する案に反対したことがよく知られている<sup>(42)</sup>。トルキスタンの統一性を主張したホジャノフらは、セミレチエ州とシルダリア州の南部を切り離して別個の山岳州を形成することによって、セミレチエとシルダリアの全体を要求していたカザフ自治共和国の案に対抗措置を考えたようにも見える。トゥラル・ルスクロフ(1894-1938)によれば、ホジャノフは当初セミレチエ州とシルダリア州のカザフ自治共和国への移管を支持していたものの、後にオレンブルグを中心としたヨーロッパ系活動家および彼らと協力関係にあったボリシェヴィキ派のカザフ人活動家との対立を懸念し、両州の移譲に反対するようになったという<sup>(43)</sup>。

このようにトルキスタン中央政府のカザフ人エリートの協力を受け、山岳カラ・クルグズ州の設立に向かって組織作業を開始することになるが、ここでウストウコフが指導した組織委員会の動機を整理しておきたい。前述のウストウコフの報告では、新しい州を設立する主な理由として二つの問題が挙げられている。同時期にカラ・クルグズ人が置かれていた不利な状態と、セミレチエ州が直面していた経済的危機の問題である。前者の問題に関してウストウコフは、1922年5月21日にピシペクで開かれた会議で、トルキスタン自治共和国の諸民族の中でも数の上ではかなりの人口のあるクルグズ人がいくつもの州・郡に散らばって、より大きな民族の影響下で暮らしているため、自らの民族的な独自性を発揮することができていないと説明した<sup>(44)</sup>。クルグズ人の経済的に不利な状況は、セミレチエ州全体の経済的危機とも繋がっていた。そのため山岳州の設立を根拠づける次の理由として取り上げたのが、クルグズ人の居住地域を含むセミレチエ州の領域の広大さと州内における交通インフラの未整備の問題だった。ウストウコフによれば、このような状況は州の発展を妨げており、州行政の正常な機能を阻害していた。そのため、州行政が効率的に機能するにはセミレチエ州で領土再編成を行い、州を二つに分割した上でその南部に山岳州を設立する必要があった。特に、クルグズ人地域が中央政府から受け取るはずの農具や工具、事務用品などを240ヴェルスタ<sup>(45)</sup>離れたアルマトウから受け取っていることを批判した<sup>(46)</sup>。

山岳州の発議者が作成した文章の中でカザフ自治共和国の領土拡大問題及びクルグズ人エリートの反カザフ人感情について言及がほぼなく、クルグズ人の不利な状況とセミレチエ州の経済的問題が取り上げられたことは興味深い。従来の研究は、この時期にクルグズ人エリー

42 境界画定に関するホジャノフの立場について以下を参照。РГАСПИ, ф. 62, оп. 2, д. 101, л. 71-83.

43 *Alash qozghalisining ongtüstik qanatı. Qıjattar men materialdar jinaghı / Южное крыло движения Алаш. Сборник материалов и документов.* Алматы, 2011. С. 133. トルキスタンのカザフ人政治エリートとクルグズ人政治エリート、そして彼らのカザフ自治共和国との関係については別稿で論じることにした。

44 ЦГА ПД КР, ф. 391, оп. 3, д. 56, л. 129-130.

45 帝政ロシアで使用されていた距離単位である。1ヴェルスタは1066.8メートルに相当する。

46 ЦГА ПД КР, ф. 391, оп. 3, д. 56, л. 129-130, 132. 1916年反乱及び革命と内戦の結果経済危機に陥っていたセミレチエにとって最大の問題の一つは交通インフラであり、特に鉄道から離れていたことが州の経済に悪影響をもたらしていた。

トの間で反カザフ人感情が強まったことを強調し<sup>(47)</sup>、山岳州の試みは最終的にトルキスタン政府内のカザフ人の関わりで失敗したと見てきた<sup>(48)</sup>。この不一致の理由は、多くの研究者が引用してきたユスプ・アブドゥラフマノフの報告書が背景にあると考えられる。様々な問題の中で特に山岳カラ・クルグズ州の問題に注目したアブドゥラフマノフがこの報告書をつ、どのような立場で執筆したかは確認されていないが、少なくとも1924年以降、つまり彼がカラ・クルグズ自治共和国の人民委員会議長（首相）を務めていた時期（1927-1933）だと推測される。1924年の中央アジア民族・共和国境界画定以来、クルグズ民族が過去に国家の優遇から疎外されてきたことの原因としてカザフ人との類似性が取り上げられることで、クルグズ人エリートの間で反カザフ人的な態度が強まり、それが1920年代末まで続いたと考えられる<sup>(49)</sup>。境界画定の時にトルキスタンの連邦制を主張したホジャノフと激しく論争したアブドゥラフマノフは、自らの報告書をこのような反カザフ人感情の中で書いたのである<sup>(50)</sup>。二人の関係は特に、1924年1月に開かれた第12回トルキスタン自治共和国ソヴィエト大会後に悪化したようである。トゥラル・ルスクロフによれば、アブドゥラフマノフはこの大会の時にホジャノフの推薦でトルキスタン共産党の書記に就任したが、その後カザフ人とクルグズ人の若い世代の活動家と協力してホジャノフの支持者に要職から辞任することを求めたため、ホジャノフとの関係を損ねてしまったようだ<sup>(51)</sup>。

アブドゥラフマノフが自らの報告書で指摘するクルグズ人活動家の反カザフ人感情は、1922年においてはカザフ自治共和国やトルキスタン中央政府にいたカザフ人に対してではなく、セミレチエ州行政内のカザフ人に対して強まったと言える。なぜならセミレチエ州当局は、クルグズ人居住地域に当たり経済力がある諸郡の分離を容認できなかったからである。不利な経済環境の中でもセミレチエ州で最も発展した地域はヴェルヌイ郡とピシペク郡、そしてプルジュヴァリスク郡であり<sup>(52)</sup>、農業や畜産業などにしても主にピシペク郡の領域に当たるチュイ盆地の存在が圧倒的だった<sup>(53)</sup>。経済力のある地域をセミレチエ州から切り離すことは、アルマトゥ市を中心とした政治活動家にとって、州全体の発展の視点から魅力的ではなかった。このような状況は、カザフ人とヨーロッパ系活動家が主な役割を果たしてきたアルマトゥ市のセミレチエ州党委員会と、クルグズ人活動家とヨーロッパ系活動家が中核を成していたピシペク郡党委員会の対立を引き起こした。アルマトゥを中心とした活動家たちは山岳州の設立に基本的に反対ではなかったが、新しい州が形成されてもそれがセミレチエ州

47 Duishembieva, “Visions of Community,” p. 244.

48 Курманов. Политическая борьба. С. 143.

49 例えばクルグズ人エリートの反カザフ人的な態度はアブドゥカドゥル・オロズベコフが1926年に全露中央執行委員会の第12会期の時に行った演説の内容からも窺えるし、1920年代後半にユスプ・アブドゥラフマノフがスターリン宛に書いた手紙の内容からも読み取れる。Образование Киргизской Автономной ССР: материалы и документы. Фрунзе, 1927. С. 15. アブドゥラフマノフの手紙については ЦГА ПД КР, ф. 391, оп. 3, д. 74, л. 50.

50 РГАСПИ, ф. 62, оп. 2, д. 101, л. 101-102.

51 *Alash qozghalısınıń ongtüstik qanatı. Qıjattar men materialdar jinaghı*, p. 133.

52 Лухтанов А. Город Верный и Семиреченская область. Алматы, 2009. С. 156.

53 Васильев А.В. Семиреченская область как колония и роль в ней Чуйской долины. Петроград, 1915. С. 250-57

当局の管轄下にあるべきだと主張したのである<sup>(54)</sup>。アルマトウの活動家から協力を得られなかった山岳州組織委員会は、ピシペクへ移動し、ピシペク郡を中心にして山岳州の形成運動を続けることになった。

このように、セミレチエ州でアルマトウとピシペクを中心とする活動家の間で山岳州の経済的な独立を巡って始まった対立は、予定されていたクルグズ人のソヴィエト大会が近づくにつれ深刻化していった。運動の拠点をピシペクに移した山岳州組織委員会は、現地のヨーロッパ系活動家の支持も得ることによってこの対立をより複雑化させた。ピシペク郡を中心とした共産党員のこのような立場を受け、セミレチエ州党委員会の委員長エフスタフィエフは5月21日にトルキスタン共産党中央委員会宛に山岳カラ・クルグズ州の形成を中止するよう求める手紙を送り<sup>(55)</sup>、翌日のセミレチエ州党委員会の会議でも山岳州の設立作業の全面的中断を求めた決議が採択された<sup>(56)</sup>。興味深いことに山岳州の中止を求めているのはセミレチエ州当局の活動家だけではなく、「コシチ」農民同盟の幹部だったクルグズ人活動家のラフマンクル・フダイクロフ(1885-?)もいた。山岳州の形成を呼びかけるスドゥコフやアラバエフらマナブ出身の人々に比べ、自分のことを農民労働者の代表者であると主張するフダイクロフは、山岳州の設立を要求しているのはスドゥコフが先頭に立つ富裕層であり、農民労働者や貧民などは支持していないと、セミレチエ州当局の会議で訴えた<sup>(57)</sup>。他方、セミレチエ当局の要求に反発した山岳州の組織委員会はトルキスタン共産党中央委員会宛に手紙を送り、この要求に根拠がないことを批判して、山岳州の設立に関する組織作業がトルキスタン中央政権によって承認されており、関係する国家機関の手続きを済ませていることを確認した<sup>(58)</sup>。

予定されていたクルグズ人のソヴィエト大会の直前に山岳州の法的地位を巡ってセミレチエ州当局とピシペク郡の間に起きた対立を解決するため、トルキスタンの中央政府が介入しなければならなかった。対立の更なる深刻化を防ぐためにトルキスタン中央政権は妥協案として予定通りに大会を開催することを許可するが、当初「設立大会」として定められたクルグズ人ソヴィエト大会の法的地位を「予備大会」に変えた<sup>(59)</sup>。つまり、大会の法的地位を変えることによって大会が山岳州を宣言する権限を取り消したのである。

ようやくセミレチエ州当局の代表者も参加した「山岳州勤労大衆の第一回予備大会」は1922年6月4日に開かれた。トルキスタン自治共和国内務人民委員部のセミレチエ州における代表者によれば、大会中にセミレチエ当局と山岳州の設立を訴える大会の参加者の間で対立が深刻化し、セミレチエ州党委員会のメンバーでカザフ人のウラズ・ジャンドソフ(1899-1938)とフダイクロフらは大会から排除されたようである<sup>(60)</sup>。大会が採択した決議の

54 ЦГА ПД КР, ф. 391, оп. 3, д. 56, л. 135.

55 ЦГА ПД КР, ф. 391, оп. 3, д. 61а, л. 20-21 (“Ташкент ЦККПТ Тюрякулову или Манжара”). 5月21日付。

56 АПРК (Архив Президента Республики Казахстан), ф. 666, оп. 1, д. 428, л. 66-67.

57 АПРК, ф. 666, оп. 1, д. 427, л. 21.

58 РГАСПИ, ф. 62, оп. 2, д. 8, л. 6 (“Телеграмма из Пишпека в Туркком и ЦК КПТ”). 日付は不明。

59 РГАСПИ, ф. 62, оп. 2, д. 8, л. 29 (“Боевая записка от члена Туркком Сольца председателю Турккома Гусеву от 17-июня 1922 года”).

60 ЦГА ПД КР, ф. 391, оп. 3, д. 61а, л. 36 (“Информсводка № 1”). 1922年6月1日付。

内容からも、山岳州の設立を呼びかけてきた組織委員会の主張が通ったことが分かる<sup>(61)</sup>。大会は山岳カラ・クルグズ州を近いうちに設立するように求め、山岳州が法的にトルキスタン自治共和国内における他の州・行政単位と同等の権利を持つ新しい州であることを主張した。多くの研究者は山岳州の法的地位を「自治」と見なすが<sup>(62)</sup>、実際には山岳州の発議者は「自治」という言葉を使用していたわけではなく、むしろ新しい州がトルキスタン自治共和国領域内における他の行政単位と同等の立場であることを積極的に強調した<sup>(63)</sup>。山岳州を設立することの経済的意義も強調され、346,960 平方ヴェルスタにも及ぶセミレチエ州を一つの中心であるアルマトゥ市から運営・管理することは困難であり、現地のイニシアチブをより重視し、経済改革を促進するために領土的再編成を行うように求めた<sup>(64)</sup>。全部で 13 項目からなる決議を採択した山岳州予備大会は最後に、山岳州設立大会の開催を承認する決議を下すようにトルキスタン中央政権に呼びかけた。

しかし、予備大会中に深刻化したセミレチエ州当局と山岳州組織委員会の対立問題はモスクワに伝わり、大会が終了した翌週にスターリン自身からの反応を引き起こした。6月13日付でロシア共産党中央アジア・ビューロー宛に送った手紙でスターリンは次のように書いている。

〔我々が〕受けた電報によると〔山岳州予備大会は〕ロシア共産党中央委員会及び全露中央執行委員会の承認を得ているようだ。予備大会は誰によって許可されているか、その組織者は誰か、大会の流れについて情報を提供せよ<sup>(65)</sup>。

スターリンの手紙からすればモスクワの中央政権はトルキスタンの情勢を把握しきれていなかったようにも見える。内戦に勝利してから2年も経っていない1922年の段階で、中央から離れたトルキスタンにおいてソヴィエト政権の立場はまだ脆弱なものだった。スターリンの手紙を受けて中央アジア・ビューローはトルキスタン委員会のメンバー、イサーク・ソリツ（1892-1940）とスルタンベク・ホジャノフからなる調査委員会をセミレチエ州に派遣した。6月20日にソリツとホジャノフらが参加したセミレチエ州党委員会の会議が開かれ、「山岳州の設立に原則として反対することはないが、現時点では山岳州の設立は時期尚早であると考えられる」という決議が採択された。同決議によってセミレチエ州党委員会と州執行委員会の職員の配置転換が行われ、山岳州組織委員会を指導してきたスドゥコフはトルキスタン中央執行委員会の下に、山岳州に反対したセミレチエ州党委員会の委員長エフスタフィエフはロシア共産党中央委員会の下に召還された<sup>(66)</sup>。本会議の終了後、タシケントにホ

61 山岳州勤労大衆の第一回予備大会の決議について以下を参照。РГАСПИ, ф. 17, оп. 33, д. 141, л. 11-22.

62 例えば、Loring, “Building Socialism in Kyrgyzstan,” p. 76; Duishembieva, “Visions of Community,” p. 244.

63 *Красное утро*. 1 июня 1922 г. № 5.

64 РГАСПИ, ф. 17, оп. 33, д. 141, л. 13.

65 ЦГА ПД КР, ф. 391, оп. 3, д. 61а, л. 3 (“В Средне Азиатское Бюро ЦК РКП”). 1922年6月13日付

66 АПРК, ф. 666, оп. 1, д. 427, л. 21.

ジャノフを緊急に呼び出した中央アジア・ビューローに対してソリツは、緊張感が高まっていたピシベク郡とカラコル郡まで足を運ぶ予定を述べ、地方における中央政権の立場を強化するために「影響力のあるキルギス人活動家が必要であり、その役割を果たせるのは唯一ホジャノフである」と事情を説明した<sup>(67)</sup>。ソヴィエト政権が初期段階で現地人エリートの協力を得ながら自らの権力を周辺地域で確立させていったことはよく指摘されるが、クルグズ人地方における不安定な政情を治めるためにカザフ人のホジャノフが適当であると判断されたことは、当時の民族アイデンティティの複雑さの他に、山岳州の問題におけるホジャノフの大きな役割を物語っていると言える。

最後に山岳州の問題を公式に終わらせた調査委員会の作業について触れておこう。9月23日にタシケントでクルグズ人のアブドゥケリム・スドゥコフとイシェナル・アラバエフが同席したトルキスタン共産党中央委員会執行ビューローの会議で、アスフェンディヤロフ（カザフ人）、クラスノフスキー、ハムトハノフからなる調査委員会が形成され、山岳州設立問題を経済・政治的側面から調査し、2ヶ月内に報告するという任務が課された<sup>(68)</sup>。本調査の結果についての史料はまだ確認されていないが、調査委員会のメンバーだったクラスノフスキーのこの問題に関する報告を紹介しておきたい。彼はロシア・ソヴィエト連邦社会主義共和国国家計画委員会の代表者としてトルキスタン自治共和国中央統計局の局長を務めており、山岳州の問題を主に経済の面から分析した。新しい州を設立することには経済的にも民族的にも意味がないと主張したクラスノフスキーは、4つの問題を指摘した。第一に、予定された山岳州はトルキスタン自治共和国内におけるクルグズ人人口の44%のみ含むことを指摘し（フェルガナ州のクルグズ人地域が含まれていなかったため）、第二に、フェルガナ州とセミレチエ州の間は山岳地帯に当たるため両州のクルグズ人の間の行き来は困難であることを取り上げた。第三に、かんがい用水路の問題にも触れ、山岳州はチュー・バルハシ水資源システムの一部をなしており、この意味でフェルガナ州よりセミレチエ州北部地域と密接に結ばれていると述べた。最後の第四としては、山岳州の形成でセミレチエ州の西部における移牧経路が切り離されることを懸念し、カザフ人とクルグズ人の遊牧民の間に夏营地問題で対立が起こると警戒した<sup>(69)</sup>。このうち特に重要な論点として取り上げたのは、山岳州が人口的にも領域的にも小さく、別個の州として設立されるには基準を満たしていない点だった。

クラスノフスキーの報告がどの程度山岳州の中止に影響を与えたかは不明だが、山岳州の形成は最終的に、現時点で重要な課題ではないという理由でキャンセルされることになった。1922年12月7日にトルキスタン共産党中央委員会執行ビューローの会議は山岳州を形成するか否かを、トルキスタン自治共和国の領域再編成問題についてロシア共産党中央委員会の意見を聞いてから決定するという決議を下した<sup>(70)</sup>。言い換えれば、山岳州の設立問題は同時

67 РГАСПИ, ф. 62, оп. 2, д. 8, л. 23 (“Председателю Туркком Гусеву от 23-июня 1922 года”).

68 АПРК, ф. 666, оп. 1, д. 499, л. 222.

69 ЦГА ПД КР, ф. 391, оп. 3, д. 61а, л. 13-18 (“К вопросу об образовании Горной Области”). 日付は不明。

70 ЦГА ПД КР, ф. 391, оп. 3, д. 61а, л. 10 (“Выписка из протокола заседания Исполбюро ЦК КПТ от 7 декабря 1922 г.”).

期に全国的に検討されていた領域再編成（районирование）の問題との関係で打ち切られたのである。クラスノフスキーが属していた国家計画委員会は1921年から全国の経済的領域再編成を訴えており、特に州レベルでの行政単位の領域を考える際に「経済的完全性の原則」を考慮しなければならないと主張していた<sup>(71)</sup>。民族問題よりも経済的問題を重視していた国家計画委員会にとって、山岳州の形成が人口と領域の側面から経済力がないとみなされたのはある意味で予想通りである。

現代クルグズ人研究者の間では、山岳州の失敗の主な原因を領域再編成の問題と結び付けるよりは、トルキスタン政府内のカザフ人エリートとフダイクロフの山岳州への反対運動と結び付けて考える傾向の方が有力である<sup>(72)</sup>。特に、初期段階で山岳州を支持していたカザフ人活動家はその後反対するようになったと見ており、その理由としてトルキスタンの政治におけるカザフ人の派閥争いを取り上げる。ホジャノフやトレクロフ、アスフェンディヤロフらは、この時期トルキスタンから離れてモスクワでの民族問題人民委員部で働いていたトゥラル・ルスクロフと対立しており、山岳州が形成されるとその要職にルスクロフ派のクルグズ人が就任すると懸念し、ホジャノフたちが山岳州を支持しなくなったという解説である<sup>(73)</sup>。しかし、この解説は逆かもしれない。なぜならば、カザフ自治共和国の領土拡大を支持する民族問題人民委員部にはルスクロフがいたし、ルスクロフ自身の証言によればホジャノフはセミレチエ、シルダリア両州の移管に強く反対していたからである。また、山岳州の形成を呼びかけるクルグズ人活動家とホジャノフらが1922年に初めて知り合い、互いの政治的立場を理解しなかったということも想像しにくい。上記で論じてきたように、山岳州は最初からホジャノフらと協力して提起した問題であり、トルキスタン中央政府の中でトレクロフとホジャノフたちはこの問題について積極的に働きかけていた<sup>(74)</sup>。山岳州が最終的に設立されなかったこと理由は、ホジャノフらの個人的な立場よりはアルマトゥとピシパクの対立が深刻化していったことにあると考えられる。セミレチエ当局と山岳州組織委員会の論争が深化するに伴い、政情を管理しきれなくなったトルキスタン中央政府は山岳州の設立が現時点では時期尚早だと判断したと言える。

### 3. 1924年：中央アジア民族・共和国境界画定とカラ・クルグズ自治州の形成

前節で見た通り、山岳州の失敗の一因は全国で議論されていた領域再編成の問題にあった。1924年の時点でソヴィエト国家の統治下にあった全地域で領域再編成が進んでおり、多くの場合、経済的基準より民族的基準を基に新しい行政単位が形成されていた。1924年初頭

71 Hirsch, "State and Evolution," p. 149.

72 例えば、*Курманов. Политическая борьба. С. 129, 131.*

73 *Джунушалиев. Время созидания и трагедии. С. 27; Курманов. Политическая борьба. С. 143.* ここでも両者ともアブドゥラフマノフの報告書を引用している。

74 トルキスタンの中央政府内でこの問題を初めてトレクロフとホジャノフが取り上げたことについてはトルキスタン委員会のメンバー、イサーク・ソリツも述べている。РГАСПИ, ф. 62, оп. 2, д. 8, л. 28 ("Боевая записка от члена Туркком Солнца председателю Турккома Гусеву от 17-июня 1922 года").

にその波がようやく中央アジアにも及び本格的に議論され始めた。ソヴィエト政権の民族政策と民族共和国の形成問題についてソ連崩壊後に多くの優れた研究が出されてきたが、その中で中央アジアの文脈で論じているハウゲンの視点を紹介したい。ハウゲンによれば中央アジアで従来のトルキスタン、カザフ両自治共和国、そしてブハラ、ヒヴァ両人民ソヴィエト共和国の代わりに民族別の共和国を形成することの主な理由は、国家の管理と統治問題と関連している。多様な民族集団が存在する中央アジアでソヴィエト政権はその民族間の分裂問題に直面しており、この分裂は民族エリートだけではなく一般民の間にも浸透していた。特に、定住民と遊牧民間の分裂は国家の管理と近代化プロセスを妨げていたとされる<sup>(75)</sup>。地域におけるソヴィエト政権の立場に影響を与えかねないと懸念された民族間の対立は、中央アジアで領土的再編成の実行を促したと考えられる。

1924年初頭にロシア共産党中央委員会組織ビューローは中央アジア・ビューローを指導していたヤン・ルズタクに対して、ブハラとヒヴァ人民共和国及びトルキスタン自治共和国の活動家の間で境界画定の可能性について議論を展開するように課題を出した<sup>(76)</sup>。当時中央アジアの民族構成は主にカザフ人とトルクメン人、そしてウズベク人の主要民族からなるという考え方が定着しており、中央政権は初期段階でこの三つの民族間の境界画定を念頭に置いていた。このような動向を背景にタシケントで開かれた第12回トルキスタン自治共和国ソヴィエト大会に参加したクルグズ人代表者は、トルキスタン共産党中央委員会とロシア共産党中央委員会宛にカラ・クルグズ人の現状に関する概説と報告を提出した。そこには次のように述べられている。

トルキスタンに暮らす諸民族「ウズベク、トルクメン、カイ・キルギス [キルギス・カイサク、現在のカザフ人のこと]」の中には、もう一つの民族が存在する。彼らの存在は、まだ党指導部と政府には知られていないが、トルキスタンにおけるこの民族の総数は100万人に達する。彼らはカラ・クルグズ人である。このカラ・クルグズ民族の存在がまだ知られていないことの原因は、キルギス・カイサク人との言語的類似性、遊牧的生活様式、生産様式—牧畜—の共通性だと考えられる。それゆえに、カラ・クルグズ人とキルギス・カイサク人の歴史に詳しくないヨーロッパ系同志たちは、多くの場合 [両民族のことを] 一つの民族—単にキルギス人とみなし、これからもそうみなしていく [と思われる]。(中略)カラ・クルグズ人をカザク・キルギス人の同種と見なすことは全く容認できない<sup>(77)</sup>。

1922年には山岳カラ・クルグズ州を設立する主な動機として、散らばって居住していたクルグズ人を一つの行政単位をまとめることと共に、セミレチエ州の経済的危機を取り上げていたのに対して、境界画定が議論され始めると、クルグズ人の代表は自民族の独自性をより強調するために、他の民族との違いも訴えるようになったのである。上記の引用から窺えるように、クルグズ人政治活動家は、特にこの問題を「ヨーロッパ系同志たち」に理解しても

75 Haugen, *The Establishment*, pp. 91, 96, 106.

76 РГАСПИ, ф. 17, оп. 33, д. 112, л. 510.

77 ЦГА ПД КР, ф. 391, оп. 3, д. 68, л. 71.

らいたかった。彼らの考えでは、最終決定者は現地人ではなくヨーロッパ系活動家、言い換えれば中央政権だったからである。山岳カラ・クルグズ州を形成する際に主にトルキスタンの政治活動家と協力していたクルグズ人が、今回は直接モスクワに訴えたことから、1922年の失敗は厳しい教訓となっていたことが分かる。

ソヴィエト初期におけるクルグズ民族主義を検討する先行研究では、1922年の山岳州の時にも境界画定の時にもクルグズ人エリートに強い反カザフ人感情があったと強調されるが<sup>(78)</sup>、実はこれらの2つの時点におけるクルグズ人エリートの立場には違いが見られる。それは1922年と比べて境界画定の時に、露骨な反カザフ人感情が現れたことである。前節で触れた通り、山岳州を形成する際にクルグズ人エリートはトルキスタン中央政府のカザフ人の協力を受けており、クルグズ人の民族としての自立性を主張する際にカザフ人との違いをあからさまに強調してはいなかった。この変化の理由は、1924年の政治状況が2年前と比べて大きく転換していたことにあると考えられる。1922年にクルグズ人エリートはトルキスタン自治共和国内での行政単位だけを主張しており、2年後に境界画定が実施されてトルキスタンという一つの共同体が解体されることは想定していなかった。一つの共同体としてのトルキスタンが存在する限り、生活様式や言語、文化的に近いカザフ人との違いを敢えて主張する緊急性はなかった。むしろヨーロッパ系農民からの土地の返還を促進した1921-1922年の土地改革や、定住民との歴史的な対立関係の文脈を考えると、一つのトルキスタン自治共和国の中で遊牧・半遊牧民であったクルグズ人とカザフ人の間には共通の利害があったはずである。その一例として挙げられるのは、1923年にロシア共産党中央委員会宛に提出された「30人のキルギス人活動家の手紙」である<sup>(79)</sup>。この手紙は主にトルキスタン中央政府にいるカザフ人が先頭に立って書かれたものであるが、その中にはカラ・カルパク人やクルグズ人、トルクメン人も含まれていた。クルグズ人活動家からはスドゥコフ、アラバエフ、フダイクロフたちが署名したこの手紙の内容は、都市と農牧村の経済関係に関する問題を描いており、具体的には定住民と遊牧民の関係で全ての都市を手に握る前者が経済、政治、宗教的に後者を圧倒的に支配していることを批判したものだ。しかし、1924年に一つの共同体としてのトルキスタンが境界画定の流れで解体され、その代わりに民族別の共和国が形成されることになると、クルグズ人活動家に自己主張が高まり、カザフ人の影響から脱して自治を求めるようになったのである。

1924年初頭に中央アジアを民族別の行政単位に分割する民族・共和国境界画定について政治決定がなされ、2月末・3月初頭から中央アジアの党政府機関内で本格的に議論されるようになった。この地域で領土的再編成を行うという政治的意志は当初からあったが、その内容や方法などについては具体的に決められていなかった。ウズベク人とトルクメン人エリートは、トルキスタン、カザフ両自治ソヴィエト社会主義共和国及びブハラ、ヒヴァ両人民ソヴィエト共和国の領域をエスニック基準に基づいて再編成することを要求した。これに対してカザフ人エリートは、中央アジアに民族性を重視した連邦共和国を形成することを望

78 Duishembieva, "Visions of Community," pp. 242-244.

79 РГАСПИ, ф. 17, оп. 33, л. 282, л. 17-23 ("Письмо руководителей Туркестана в Средазбюро о киргизо-узбекских противоречиях").

んだ。行政・領土再編成の具体的な案や実施方法について論争があったものの、どのように民族を区分して、領土を再編成するかについて、モスクワの中央政権には最初からある程度のイメージがあった<sup>(80)</sup>。それは、中央アジアの「主要民族」と定義されたカザフ人、トルクメン人とウズベク人のことだった。つまり、中央政権は、領土的再編成を行うとしても、それはこれらの主要民族間の境界線を定める作業と認識し、3つの民族共和国の形成を想定していた。そのため、民族・共和国境界画定についての議論が始まった時、クルグズ人やカラ・カルパク人、タジク人、さらに言えばクラマヤやキプチャク人などのエスニック集団について言及はなかった。

したがって、中央アジアでエスニック基準に基づいた再編成が行われようとした時、クルグズ人エリートは、自分たちが「主要民族」とは見なされていないという問題に直面した。そこで、彼らは中央アジアの「主要民族」と認められるために、各民族集団の文化・言語的独自性を重視する中央アジアのエスニック的再編成を訴えることになる。そしてこの頃からクルグズ人エリートの間には強い反カザフ人感情が生まれる。独立の民族として認められていないため、クルグズ人は各民族集団の言語、学校、新聞などを発展させるために国家から割り当てられる予算を享受することもできなかった。クルグズ人エリートは、このような不利な状況の最大の理由は、クルグズ人がカザフ人の一部と見なされていることだと考えた。それゆえにカザフ人から分離し、一個の独立した民族として訴えなければ必要な予算分配を受けられないと恐れたのである。3月に開かれた中央アジア・ビューローの会議で、「主要民族」の考え方に沿ったウズベク、(カザフ人とクルグズ人の意味での)キルギス、トルクメンの3つの共和国を形成することが提案されると、イシェナル・アラバエフは次のように反論した。

ウズベク人が発言すると、フェルガナとサマルカンドから話を始め、さっそくタシケントを通過してアウリエ・アタに移り、カラ・クルグズ人のことは忘れる。あるいは、他のカザフ人が発言すると、彼はジェティスー [セミレチエ] 州とシルダリア州については話をするが、ジェティスーのカラ・クルグズ人については全く言及しない。私が先日指摘したように、これらの3つの主要民族と共にもう2つ、カラ・クルグズとタジクの両民族も数えなければならない。だから、全部を合わせると3つの民族ではなく、5つの民族になる。(中略) 私は、中央委員会の会議においてトルキスタンは3つではなく、5つの主要民族からなるということをあらためて強調しておきたい<sup>(81)</sup>。

アラバエフを含むクルグズ人活動家の考えでは、中央アジアには連邦共和国ではなく、これら5つの民族地域に分かれた民族共和国を形成することが望ましかった。こうして彼らの立場は、中央アジアの連邦制案を支持していたカザフ人とは異なることになった。ロシア革命期における難民問題を解決する上での両民族の知識人の協力や、アラシュ運動におけるクルグズ人エリートの役割を考慮すると、今回の反カザフ的な態度は興味深いと考えられる。彼らは、両民族の同盟、あるいは広く言えば中央アジアの連邦制に対して既に信頼を失ってい

80 Haugen, *The Establishment*, pp. 166-67.

81 РГАСПИ, ф. 62, оп. 2, д. 101, л. 97.

た。少数派であるクルグズ人の立場を考えれば、カザフ人の枠内においても、中央アジア連邦の枠内においても、彼らが以前と同様に過小評価され続けることは明らかだったからである。ユスプ・アブドゥラフマノフは、「工具や農具、予算などを分配するために連邦を作るよりは、各自治共和国と自治州は、自らの幸福を、自らの力でモスクワから求めたほうがましだ」とすら述べている<sup>(82)</sup>。アブドゥラフマノフの考えでは中央アジアに連邦制を導入しても、既存のトルキスタンの状況から大きな違いはなく、単に「看板をかけ変える」だけの話であり、連邦制では中央アジア民族間の共有予算、国家支援、管理職への競争から生じていた対立関係を解決することは不可能だった。

しかし、クルグズ人の間には民族別の共和国案に反対する活動家もいた。第2節で触れたように1922年の山岳カラ・クルグズ州を形成する時、ラフマンクル・フダイクロフはクルグズ人エリートの主流からは異なった道を選び、山岳州の設立を時期尚早だと見なしていた。今回フダイクロフは、民族・共和国境界画定に原則として反対ではなかったものの、民族間の対立関係や行政・領土問題は連邦制の下で解決できると考えた<sup>(83)</sup>。現代のクルグズ共和国の歴史研究では、カザフ人の祖先を持っていたフダイクロフがクルグズ人の民族国家の形成を妨げたとして批判される<sup>(84)</sup>。しかし、民族・共和国境界画定における彼の発言を分析してみると、必ずしもクルグズ人の行政単位の設立に反対していたわけではないように読み取れる。アラバエフと同様に、民族共和国を計画する際にクルグズ人のことが無視されたことを批判したフダイクロフは、むしろ彼のクルグズ社会における権力を支えてきた勤労農民組織「コシチ」の将来を懸念していた。つまり、1922年に山岳カラ・クルグズ州が形成されると彼が指導的立場にいた「コシチ」組織の役割が低下すると懸念したフダイクロフは、1924年にもクルグズ人の民族自治州が設立されると、彼の政治的ライバルだったストウコフの支持者たちが新しい自治州における党機構と政府機関を支配することになり、「コシチ」組織も直接的に彼らに従属させられると恐れたのである<sup>(85)</sup>。

他方、山岳州問題と境界画定の共通点としては、1922年の時と同様に1924年にもクルグズ人の自治問題はトルキスタン自治共和国のカザフ人地域の将来と関連していた点が挙げられる。上記で触れた境界画定に関する最初の案では主要民族の考えに沿って3つの共和国を形成する案が出されたと述べたが、そのうちキルギス共和国というのは1920年にオレンブルグを首都としてロシア連邦共和国内に設立されたカザフ(当時のロシア語名称はキルギス)自治社会主義共和国とは別に、トルキスタンのカザフ人とクルグズ人地域—シルダリア州とセミレチエ州<sup>(86)</sup>—から形成される新しいキルギス共和国のことだった<sup>(87)</sup>。この構造の意味は、経済的にステップ地方のカザフ自治共和国よりもトルキスタンの地域との関係が深いシルダリア州とセミレチエ州を、中央アジア経済協議会<sup>(88)</sup>の枠内に取り残すということにあっ

82 Там же, л. 102.

83 Там же, л. 84-86.

84 Курманов. Политическая борьба. С. 133.

85 РГАСПИ, ф. 62, оп. 2, л. 101, л. 103.

86 1922年にセミレチエ州の名称はジェティスー州に改称されたのである。

87 РГАСПИ, ф. 62, оп. 2, л. 101, л. 13.

88 同協議会(Средне-Азиатское Экономическое Собрание)は1923年にブハラとヒヴァ両

た。1922年の山岳州の時と同様、オレンブルグのカザフ人エリートは依然としてこれらの地域をカザフ自治共和国に編入することを主張していた。それに対してホジャノフを含むトルキスタン地域のカザフ人エリートは、両州を現行のカザフ自治共和国にそのまま編入するのではなく、ヨーロッパ系人口の多いオレンブルグ県をカザフ自治共和国から排除したうえで、シルダリア州とセミレチエ州を含むカザフ共和国の首都をシルダリア州に移すべきだと求めた<sup>(89)</sup>。いずれも両州をカザフ自治共和国に編入することでは同意しているが、ホジャノフらは首都をヨーロッパ系活動家が支配的立場にいたオレンブルグ市からカザフ人口の多いシルダリア州に移すことによって、トルキスタンのカザフ人の立場も強化したかっただろうし、カザフ共和国におけるカザフ人人口の割合を引き上げる狙いもあっただろう。首都の問題を解決しないまま境界画定が進められる中で、ホジャノフはシルダリア州とセミレチエ州からなるキルギス共和国案を支持した<sup>(90)</sup>。

1922年にトルキスタン地域のカザフ人エリートがカザフ自治共和国の領土拡大への対抗措置として山岳州を支持したことと、1924年にシルダリア州とセミレチエ州のカザフ自治共和国への編入をためらいキルギス共和国の案を取り上げたことは、トルキスタン地域におけるカザフ人とクルグズ人の社会経済的近接性を表していると考えられる。キルギス共和国の案は、換言すれば山岳カラ・クルグズ州とトルキスタンのカザフ人居住地域を合わせたものとして考えられたのである。しかし、経済的視点から論理的に見えたキルギス共和国は、民族的視点からすればカザフ人の民族問題を解決できない構造だった。それを理解していたトルキスタン出身のカザフ人活動家は、ヨーロッパ系人口の多いオレンブルグ県を現行のカザフ共和国から排除することと首都を南部のシルダリア州に移すことを要求しただろう。歴史的に一つの民族国家の下でまとまろうという運動が強かったカザフ人が2つの共和国に分割されることは、「キルギス共和国」の案を境界画定が終わる1924年11月まで取り上げていた<sup>(91)</sup>トルキスタン地域のカザフ人にとっても、できれば避けたい選択肢だったようにも見える。

クルグズ人エリートもキルギス共和国の案に最初から消極的であった。既に1920年の時点でトルキスタンのカザフ人が最終的にカザフ自治共和国と統合されると決められていたと指摘したイシェナル・アラバエフは、クルグズ人の自治の問題はセミレチエ州とシルダリア州がカザフ自治共和国に編入されるかどうかに関係なく検討されるべきだと主張した<sup>(92)</sup>。こ

---

人民ソヴィエト共和国、トルキスタン自治ソヴィエト社会主義共和国の代表者から、これらの諸共和国の経済政策を包括する機関として設立された。Гордиенко А. А. Создание советской национальной государственности в Средней Азии. Москва, 1959. С. 126.

89 РГАСПИ, ф. 62, оп. 2, д. 101, л. 78. カザフ人は歴史的に大、中、小の3つのジュズ（部族同盟）に分けられており、シルダリア州にあるシルダリア川の中流域は三つのジュズの境界の接触点として中心地だったことが先行研究でも指摘されている。Tomohiko Uyama, "The Geography of Civilizations: A Spatial Analysis of the Qazaq Intelligentsia's Activities, from the Mid-Nineteenth to the Early Twentieth Century," in Kimitaka Matsuzato, ed., *Regions: A Prism to View the Slavic-Eurasian World* (Sapporo: Slavic Research Center, 2000), p. 74.

90 РГАСПИ, ф. 62, оп. 2, д. 100, л. 3.

91 РГАСПИ, ф. 17, оп. 33, д. 389, л. 153.

92 РГАСПИ, ф. 62, оп. 2, д. 101, л. 40.

うして、当初から民族別の共和国形成案を支持していたウズベク人とトルクメン人エリート  
の他に、従来まで協力し合っていたクルグズ人エリートもカザフ人の中央アジア連邦案を否  
定したのである。最終的に 1924 年 4 月から 5 月にかけて連邦案支持者と民族共和国案支持  
者の間で交わされた激しい論争の結果、地域を民族別に分割する民族共和国案が採択され  
た。

5 月 28 日にモスクワで開かれた全連邦共産党中央アジア・ビューローの会議では、ブハラ、  
ヒヴァ、トルキスタンのウズベク人を統合するウズベク共和国と、トルクメン人を統合する  
トルクメン共和国を形成し、トルキスタンのカザフ人地域を既存のカザフ自治共和国と統合  
させるという決議が採択された。クルグズ人については、直接ロシア連邦共和国に帰属する  
カラ・クルグズ自治州を形成すると定められた。そしてウズベク共和国の中にタジク自治州  
が設置されることになった<sup>(93)</sup>。最後に、カラ・カルパク人の政治エリートも自治を要求した  
ため、カザフ自治共和国の管轄下にカラ・カルパク自治州を形成することが決められた<sup>(94)</sup>。  
このうち、ウズベク共和国とトルクメン共和国にはソ連の民族共和国の中で最も地位が高い  
連邦共和国の資格が与えられ、紙の上ではロシア連邦共和国を含む他の連邦加盟共和国と対  
等の立場でソ連邦に加入した。

#### 4. 領土委員会での境界画定作業をめぐる交渉

しかし、民族・共和国境界画定はこれで終了したわけではない。最も困難な作業がその先  
にあった。前述の 5 月 28 日の会議では、民族共和国間の境界を具体的に定めるために各民  
族の代表者と中央アジア・ビューローのメンバーからなる領土委員会が設置され、さらにそ  
の中に各共和国・自治州の将来の領域について報告を準備する民族領土小委員会が形成され  
た。クルグズ領土小委員会に誰が参加していたのかを確定することは難しいが、民族・共和  
国境界画定の全体のプロセスには、ユスプ・アブドゥラフマノフ、イシェナル・アラバエフ、  
ラフマンクル・フダイクロフ、タリムルザ・ズルフィバエフとアブドゥカドゥル・オロズベ  
コフが関わっていた<sup>(95)</sup>。このうちアブドゥラフマノフが、8 月後半から 9 月初頭まで行われ  
た境界を画定する領土委員会の会議においてクルグズ領土小委員会の代表者として報告を担  
当した。他の民族領土小委員会の報告者と同様に、彼の報告にもやがて形成されるカラ・ク  
ルグズ自治州の領域に含まれる地域・郡のリスト及び各地域におけるクルグズ人の数が含ま  
れた。そして、それを基に領土委員会の会議で各代表者が報告してから、討論が開始される  
流れだった<sup>(96)</sup>。領土委員会の会議における各民族の代表者間の議論は従来の先行研究でも詳

93 РГАСПИ, ф. 62, оп. 2, д. 100, л. 7. 同年の秋に、共和国間の領域が画定してからタジク自治州  
は自治共和国に昇格することになる。

94 Haugen, *The Establishment*, pp. 172-79.

95 史料からは、各民族領土小委員会の委員の名簿を確認することが難しい。5 月の民族・共和国境  
界画定に向けて、具体的な計画を作成するために形成された 3 つの小委員会 [ウズベク、トルク  
メン、カザフ] の場合のみ、そのメンバーを把握することができる。РГАСПИ, ф. 62, оп. 2, д.  
100, л. 1. 共和国間の境界を画定するために 8 月から 9 月にかけて行われた領土委員会の会議には、  
ユスプ・アブドゥラフマノフ、イシェナル・アラバエフ、タリムルザ・ズルフィバエフとアブドゥ  
カドゥル・オロズベコフらが参加した。РГАСПИ, ф. 62, оп. 2, д. 104.

96 領土委員会の会議について РГАСПИ, ф. 62, оп. 2, д. 104 を参照。

細に分析されてきた<sup>(97)</sup>。しかし、クルグズ人エリートについては彼らの立場に総括的に言及するだけで、特に本稿で見てきた1920年代前半におけるクルグズの自治運動の中でどのように位置付けられるのかは検討されていない<sup>(98)</sup>。

カラ・クルグズ自治州の領土を描いたアブドゥラフマノフの報告では、フェルガナ州のクルグズ人地域に重点が置かれた。1922年に山岳カラ・クルグズ州の形成を試みた際、フェルガナ州のクルグズ人地域は反ソヴィエト運動（バスマチ運動）との戦いに巻き込まれていたため、状況が静まるまで山岳州の領域に含まれないとされていたが、今回クルグズ人エリートの主な努力はフェルガナ州のクルグズ人地域の確保に注がれた。クルグズ側にとって最も重要だったのは、フェルガナ盆地の諸都市の帰属問題だった。特に、フェルガナ州の4つの都市、ナマンガン市、アンディジャン市、オシュ市とジャララバード市がウズベク人とクルグズ人領土小委員会の駆け引きの対象となったのである。この中でクルグズ側にとって最大の目的は、カラ・クルグズ自治州の行政の中心として予定されたアンディジャン市だった<sup>(99)</sup>。

しかし、問題はアンディジャンを含むフェルガナ盆地の諸都市の人口が、ウズベク人かサルト人もしくは両方、およびクラマやキプチャクなど少数エスニック集団からなっていたことにあった。エスニック基準から考えると、これらの都市で少数派だったクルグズ人の要求は説得力がないように見えた。しかし彼らは、新経済政策の開始以降よく言われるようになった、「都市はそれを囲む周辺地域に帰属すべきである」という考えを活用した。彼らは、アンディジャン市やオシュ市などでは、人口が圧倒的にウズベク人かサルト人、あるいは両方からなっていることを認めながらも、周辺地域の民族の割合から、これらの都市のカラ・クルグズ自治州への帰属を求めた。都市だけではなくその周辺地域を含めて考えると、多くの場合、遊牧か半遊牧生活様式を有していたクルグズ人や文化・生活様式の面で彼らに近いキプチャク人、テュルク人、クラマ人などは、総数で定住民のウズベク人とサルト人を超えていたからである。

フェルガナ地域で最も発展していたアンディジャン市を要求するクルグズ側には、他の理由もあった。それは、過去に不利益を受けてきた少数民族—当時の言葉では過去の被抑圧民族—に幅広い発展の機会を与えるという、民族・共和国境界画定の過程で語られていた言説と関連していた。遊牧民の割合が多かったクルグズ人やカザフ人、トルクメン人の代表者には、中央アジアの遊牧民は帝政時代から最も圧迫されてきた集団であるという認識が強かった<sup>(100)</sup>。そのため、都市の人口の大多数がクルグズ人でなくても、過去に被害を受けてきた民

97 Койчиев. Национально-территориальное размежевание. С. 37-47; Ожукеева. 20-й век. С. 32-36; Haugen, *The Establishment*, pp. 188-194.

98 境界画定におけるクルグズ領土小委員会の立場についてハウゲンは的確に議論を展開しているが、1924年までのクルグズ人エリートの動向を検討しておらず、1922年の山岳州の問題と境界画定におけるクルグズ人エリートの立場を比較していない点を指摘できる。逆に山岳州の問題を論点に入れているオジュケエヴァとコイチエフについては、論争となったクルグズ人地域の帰属問題を詳細に論じている反面、境界画定が行われた政治・経済的文脈と、クルグズ領土小委員会に入ったクルグズ人エリートの動向を分析しなかった点が挙げられる。

99 РГАСПИ, ф. 62, оп. 2, д. 104, л. 30.

100 このような考え方は、クルグズ人の場合は、1924年初頭に中央政権に提出した「カラ・クルグズ

族として彼らにも発展の機会を与えるべきだという論理で都市を獲得し、民族自治州の将来性を保障しようとしたのである。特にこのような発想はアンディジャン市の帰属問題に関するアブドゥラフマノフの発言から窺える。

この町〔アンディジャン〕は、周辺の4つの地区と共にカラ・クルグズ自治州へ移譲されるべきである。人口の大部分がウズベク人であることを否定せず、アンディジャン市は我々に渡されるべきだと主張するには理由がある。まず、民族別行政区分に分割することは、被抑圧民族に経済及び文化を発展させるための機会を与えるという幅広い目的にかなっていない。アンディジャンは、フェルガナ地域のカラ・クルグズ人にとって、その大多数に知られている経済的な先進地域である。アンディジャンをカラ・クルグズ人から切り離すということは、遊牧民のクルグズ人を全く活気のない状態にさせることを意味する。なぜならば、カラ・クルグズ人に他の〔経済的〕中心は存在しないからである<sup>(101)</sup>。

アンディジャン市を含むフェルガナ盆地の都市の帰属問題は、タシケント市とタシケント郡の帰属問題と並んで境界画定における重要な問題の一つだった。これまで民族運動に関わっていなかったフェルガナ州出身のクルグズ人活動家もクルグズ領土小委員会に含まれたことから、フェルガナ州の都市の帰属問題を巡って激しい論争が起こることをクルグズは十分に想定していたと考えられる。具体的には、フェルガナ州出身のタリムルザ・ズルフィバエフ(1896-1938)とアブドゥカドゥル・オロズベコフ(1889-1938)らが小委員会に加えられ、フェルガナ州の諸都市に関する議論の中で彼らが先頭に立って発言したのである<sup>(102)</sup>。

境界画定に関して先行研究で検討されなかったもう一つの問題は、境界画定が北部と南部の政治エリートの団結を促進させた点であろう。1924年まで、北部と南部のクルグズ人エリートが共に活動した記録は確認されていない。彼らが団結し、一つの民族の代表者として登場するのは中央アジア民族・共和国境界画定の時期である。ソヴィエト初期のクルグズ人政治活動家と言えば、主に北部(シルダリア州とセミレチエ州)出身の活動家について議論されがちだが、同時代の南部出身のエリートの動向についてはまだ不明な点が多い。境界画定に参加した南部出身の活動家として調べた限りではズルフィバエフとオロズベコフを把握できたが、そのほかにもいるかもしれない。いずれにしても、フェルガナ州の経済的中心地が諸民族の間で駆け引きの対象になった領土委員会の会議で、南部出身のクルグズ人の存在は大きかったと言える。

そして、北部出身のクルグズ人の相互関係の視点から言えば、境界画定は派閥争いに走りやすい北部エリート同士の立場をも一時的に接近させたように見える。特に、山岳カラ・クルグズ州の形成に反対していたラフマンクル・フダイクロフは、中央アジア連邦共和国の案を支持して他のクルグズ人活動家と違う意見を持ってはいたが、最終的に自治に反対した訳

---

人の現状に関する概説」にも読み取れるが、最も顕著に見られたのは領土委員会における論争の時だった。カザフ人活動家の場合、特に民族共和国案に反対していたスルタンベク・ホジャノフの発言から窺える。РГАСПИ, ф. 62, оп. 2, л. 100, л. 15-16, 22.

101 РГАСПИ, ф. 62, оп. 2, л. 104, л. 27.

102 РГАСПИ, ф. 62, оп. 2, л. 104, л. 107-111.

ではない。クルグズ人の自治問題に言及しなかったラヒムバエフを批判したことは、彼が基本的にカラ・クルグズ自治州の形成に否定的ではなかったことを示している。このように、境界画定は全体的に民族エリートの団結を促し、従来まで地理的に分割されてきた集団同士だけではなく、対立関係にあった人々をも統一した政治過程であったと言える。

領土委員会の会議で、クルグズ領土小委員会による報告の大部分はフェルガナ州を中心に語られたが、結局アンディジャン市はウズベク側に与えられた。同市に関する会議の投票ではクルグズ側に6人、ウズベク側に8人が投票した。アンディジャン市のみならず、すべての境界線が会議の参加者の投票で引かれた。クルグズ人が要求した4つの都市のうち2つ、オシュ市とジャララバード市がクルグズ自治州に含まれ、ナマンガン市とアンディジャン市はウズベク共和国に与えられた。他方、カザフ自治共和国と接する北部の境界について、アブドゥラフマノフの報告ではわずかしが言及されなかった。それは、クルグズ人とカザフ人の境界は既に山岳カラ・クルグズ州の時からある程度定められていたからだと考えられる<sup>(103)</sup>。クルグズ人とカザフ人領土小委員会の間に生じた唯一の問題は、夏営地の境界に関連していた。しかしこの問題も、夏営地を共有で使用するという妥協点を見出すことができ、それほど困難なく解決された。計画されたカラ・クルグズ自治州の全人口は101万9千人であり、その内60%をクルグズ人、23%をウズベク人、17%を残りの少数民族が占めた。面積は195,800平方ヴェルスタ(222,8204平方キロメートル)に達しており、現在の198,500平方キロメートルの面積よりかなり大きかった<sup>(104)</sup>。最終的にカラ・クルグズ自治州の設置は、1924年10月14日に全ロシア中央執行委員会の承認を受け公式に宣言された。

## 結 論

近年の先行研究では、ソヴィエト中央アジアにおける民族共和国の形成過程は中央政権と現地人エリートの議論と交渉の結果であると解釈されており、現地人エリートの役割に注目が集まっている。ソヴィエト・クルグズスタンの形成も中央アジアの他の民族共和国と同様、現地人エリートが大きく影響した政治過程であった。しかし、本稿で論じたように、他の中央アジアの民族と異なり帝政末期から近代的政治エリートの育成が遅れたクルグズ人の場合、ソヴィエト国家枠内での自治を獲得する運動は同時代の政治・経済的文脈に強く依存しており、いくつかの段階で展開し、さらにその各段階で異なった特徴を持っていた。ソヴィエト・クルグズスタンの形成過程の機動力として主にクルグズ人政治エリートの役割に焦点を当てていた先行研究と異なり、本稿では、クルグズ人エリートの役割と同時に彼らが置かれていた当時の政治・経済的文脈や、彼らとカザフ人エリートや中央政権との関係の重要性

103 クルグズとカザフの間には1922年の時も1924年の時も深刻な領土問題は生じなかった。1922年に山岳州の領土は議論されず、スドゥコフらが提案した領土がそのままトルキスタン中央執行委員会によって承認されていた。

104 その一因は、当初はカラ・クルグズ自治州に含まれた東パミールのクルグズ人地域が、1924年末から1925年初頭にタジク自治共和国に移譲されたことと関係している。*Гатагова А. С., Кошелева Л. П., Роговая Л. А. ЦК РКП (б) – ВКП (б) и национальный вопрос. Книга 1. 1918-1933. Москва, 2005. С. 242, 246.*

を主張した。その結果、ソヴィエト・クルグズスタンの形成過程はクルグズ人とカザフ人の相互関係に依存していたこと、初期段階でクルグズ民族主義は必ずしも反カザフ人感情の特徴を持っていなかったこと、またクルグズ人エリートの中に反カザフ人的な態度が強まるのは、カザフ人との関係よりも当時の社会経済的文脈、とりわけ一つの共同体としてのトルキスタンの解体と直接つながっていることを明らかにした。

現代クルグズスタンにおいて、1922年の山岳州の形成の試みはクルグズ人の民族国家の出発点とされている。しかし、山岳州はクルグズ人エリートの発議であると共に、彼らと協力関係にあったトルキスタンのカザフ人エリートの発議でもあったということを指摘する人はいない。カザフ人エリートには山岳州を支持する彼ら独自の政治的動機があったとしても、クルグズ人の初めての自治運動にカザフ人が深く関係していたということは、帝政時代から続いてきた両民族の特別な関係を象徴していると思われる。

山岳州の例はカザフ人とクルグズ人の二者関係を示しているだけではない。そこには、1922年という初期段階の広大なソヴィエト・ロシアにおいて権力の分配に現れた三者関係・四者関係も見られる。この例はソヴィエト中央政権（モスクワ）、地域中央政権（タシケント）及び周辺地域政権（アルマトゥとピシペク）の間にソヴィエト国家のあり方・方向性について異なる見方が存在し、現地の政情が必ずしもモスクワの指導で動いていたわけではなかったことを証明している。山岳州の場合に特に現れたのは、地域中央政権の指導権（山岳州を設立するトルキスタン政治エリートの決定）と、国家の発展・方向性に関する周辺地域政権内における異なる見方（アルマトゥとピシペクの対立）である。しかし、山岳州に関するスターリンの手紙の例で見られるように、現地中央政権の指導権と周辺地域政権内における発言力には限界があった。

中央アジア民族・共和国境界画定は、地域中央政権と周辺地域政権の「自由」を完全なコントロール下に置こうとした中央政権の政策である。この政策を実施するために中央政権は歴史的に形成されてきた中央アジアの諸国家形態を解体し、代わりに民族共和国を形成することを決定した。境界画定の主な目的が現地中央政権と周辺地域政権内の派閥争いを防止し、政治エリート間の民族アイデンティティを促進し、そして彼らの力を互いとの対立ではなく民族共和国内の国家づくりに方向付けようということにあったとすると、境界画定におけるクルグズ人エリートの団結はその狙いの成功例として挙げられる。1922年の山岳州の問題と比べて境界画定の実施はクルグズ人エリートの団結を促しただけではなく、彼らの民族主義の内容も大きく展開させ、反カザフ人感情をより浮き彫りにしたのである。1922年の時点で、クルグズ人エリートには先行研究で論じられてきたほどの反カザフ人感情はなかった。本稿の第3節で示した通り、それは一つの共同体としてのトルキスタンにおける彼らの社会・経済的つながりがあったからである。一つのトルキスタン共和国が存在する限りクルグズ人とカザフ人の歴史的繋がりはずっと続いたかもしれないが、トルキスタンの解体を引き起こした境界画定の実現はそれを不可能にした。

ソ連初期におけるクルグズ人の自治問題がカザフ人と深く関連していることのもう一つの例は、トルキスタン地域のキルギス共和国の案である。トルキスタンのカザフ人とクルグズ人地域を含むキルギス共和国はカザフ人の拡張主義としても読み取れる一方、同時代のカザフ人とクルグズ人の社会経済的近接性、その近接性が他の民族の代表者にも自然に受け止め

られていたこと（キルギス共和国案は最初にウズベク人のラヒムバエフによって提案された）を語っていると言えるだろう。しかし、経済の視点から有利にも見えるキルギス共和国案は、境界画定の最も大きな問題であった民族問題を解決できない構造だった。それはカザフ人にとって民族が文字通り2つに分割されることに等しかったし、カザフ人の間で過小評価されていたクルグズ人エリートがカザフ人の影響から脱しようとする望みも解決できないものだったからである。

クルグズ人エリートは境界画定の際、山岳州の時と同様に民族行政単位を望んでいただけではない。第3節で論じた通り、1924年に彼らは経済力のある民族行政単位を要求したのである。これは単に行政単位の設立を呼びかけた山岳州の問題と異なる点だと言える。民族の視点からするとウズベク人の人口が多いフェルガナ州の諸都市を最後まで主張し続けた当時のクルグズ人エリートは、自治を獲得したとしてもカラ・クルグズ自治州の経済的展望についてかなり懸念していたように思われる。境界画定の時に中央アジアの経済的統一性を主張したカザフ人のホジャノフたちと論争し、民族共和国案を訴えたユスプ・アブドゥラフマノフが1920年代末に立場を考え直し、むしろ中央アジア連邦の形成を望むようになったのも<sup>(105)</sup>、今日のクルグズ共和国にも見られる不利な経済状況に、彼らが当時から悩まされていたことを反映している。

---

105 *Адрахманов. 1916. Дневники. С. 97.*

## **Создание Советского Кыргызстана: появление и развитие национализма кыргызской политической элиты в раннесоветский период**

**Мирлан Бектурсунов**

Во многих исследованиях последних лет по теме становления первых советских республик в Центральной Азии главенствующая роль отводится местным элитам. Так мы знаем, что по тем временам развитая и образованная узбекская и казахская политическая элита играла очень важную роль при строительстве национальных республик. По истории образования Узбекской, Казахской и Туркменской республик написано достаточно много книг и журнальных статей как в самих этих республиках, так и за рубежом.

Хотя и долгое время оставалась неизвестной проблематика касающегося создания Советского Кыргызстана, тем не менее процесс приобретения кыргызами автономии тоже можно охарактеризовать как процесс диалога между кыргызской политической элитой и советской властью. Кыргызская элита того времени активно участвовала в процессе становления Кара-Кыргызской Автономной Области. Но по сравнению с более крупными соседями (Узбекистан, Казакстан) становление Советского Кыргызстана и роль в ней кыргызской элиты до сих пор имела свои белые пятна.

С началом независимости в Кыргызской Республике появились достаточно работ посвящённые к этой проблематике. В настоящей статье автор их называет «первой волной» научных работ. В этих работах впервые были освещены многие неизвестные факты участия кыргызской элиты в политических процессах тех годов. Последующие работы в основном отталкивались от источниковедческой базы этой первой волны научных работ. В основном задавая те же вопросы и повторяя те же результаты, последующие работы с течением времени упустили некоторые важные моменты при создании Советского Кыргызстана.

В этой работе такую ситуацию автор описывает как «зависимость от первой волны научных работ». Так как первые работы по национализму кыргызской элиты раннесоветского периода появились в самые первые годы независимости, в период, когда независимый Кыргызстан нуждался в «отцах основателях», то в них многие авторы старались описывать политические процессы «элитоцентрично», т.е. как бы сама элита была двигателем всех процессов. Однако, такой метод описания не учитывает те важные нюансы, которые имели решающее значение на процесс строения Советского Кыргызстана.

В отличие от предыдущих работ, в этой работе, не умаляя заслуг кыргызской элиты тех годов, тем не менее автор обращает внимание на важные социально-политические аспекты становления и развития национализма кыргызской элиты в раннесоветский период. В частности, указывается на сложные взаимоотношения кыргызской элиты с элитами других народов, в особенности с казахскими активистами. Так, казахская элита поддержала первый автономный проект кыргызской элиты - Кара-Кыргызскую Горную Область – в 1922 году. Тогда кыргызская элита официально не требовала «автономии», как указывалось до этого, а всего лишь территориальной

единицы в виде областного управления. Казахская элита Туркестана не была против Кара-Кыргызской Горной Области. Наоборот, она поддержала этот проект, и даже лоббировала в властных структурах Туркестанской Республики.

С другой стороны история создания Советского Кыргызстана и участие в этом процессе кыргызской элиты всегда оставались не полностью рассказанными. В особенности это касается периода национально-территориального размежевания (НТР) в 1924 года. Как известно в 1924 году в Средней Азии провели НТР, в рамках которого были созданы национальные республики вместо трёх государственных образований (Бухарской и Хивинской Народных Советских Республик и Туркестанской АССР). Многие исследователи, обращая внимание на проблему Кара-Кыргызской Горной Области 1922 года, в тоже время, почему-то проблему НТР и участие в ней кыргызской элиты оставляли за пределами детального анализа (еще один признак зависимости от первой волны научных работ). В этой работе автор доводит процесс создания Советского Кыргызстана до логического конца, т.е. рассматривает национально-территориальное размежевание и участие в ней кыргызской элиты.

Во время НТР кыргызская элита, упрекая центральные власти в игнорировании интересов кыргызской нации, стала требовать автономию. Главное отличие требования кыргызской элиты в 1924 от требования во время Кара-Кыргызской Горной Области заключается в том, что в этот период среди кыргызских руководителей появляется неприкрытая анти-казахская тенденция. Многие исследователи видели в проекте Кара-Кыргызской Горной Области анти-казахскую реакцию, но как указывалось выше, в 1922 году кыргызская элита тесно сотрудничала с казахской элитой, и трудно в этой ситуации увидеть у них неприкрытые анти-казахские чувства. Настоящие анти-казахские чувства у них появились только в 1924 году, во время НТР. И объективной причиной тому было само НТР, а не личностные отношения между лидерами двух народов. НТР предполагало распадение Туркестанской АССР как единой социально-территориальной единицы, в которой казахи и кыргызы жили в бок о бок с царских времен. В рамках единого Туркестана у кыргызов и казахов было больше общего, чем противоречия. Оба народа составляли кочевые и полукочевые части ТАССР, соответственно у обоих был один социально-экономический противник в виде оседлого народа (в основном узбеков), и у обоих народов были очень незначительные человеческие ресурсы для управления отдельной республикой.

Но роспуск Туркестана как единой территориальной единицы и создание вместо него национальных республик с чётко очерченными границами побудили кыргызскую элиту выйти со своим проектом автономии. В ситуации, когда Туркестан распадался, казахско-кыргызская связь уже не имело той силы и смысла, так как в 1920 году была создана Казахская Автономная Республика и все казахское население Туркестана планировали присоединить туда.

Кыргызская элита не хотела присоединения в Казахскую АССР. Причиной тому были социально-экономические факторы. При присоединении к КАССР, Кара-Кыргызская АО должна была бы выйти из Средне-Азиатского Экономического Сопровождающего Комитета, которое было важно для укрепления экономики. Другая причина состояла в том, что присоединение к КАССР не решало проблему их статуса «меньшинства» среди казахской элиты. Поэтому кыргызская элита требовала самостоятельной

автономии.

Но в этот раз, кыргызская элита требовала не только территориальной единицы как в 1922 году или просто автономной единицы. В процессе НТР перед кыргызской элитой стала задача приобретения автономии с экономическими ресурсами. Они требовали включить в состав Кара-Кыргызской Автономной Области те города, чье население с этнической точки зрения состояло в основном из оседлых народов. Основной целью кыргызской элиты был город Андижан, который они рассматривали как столицу будущей автономии. Но Андижан был присоединен к Узбекской Республике, а Кара-Кыргызская Автономная Область, вобрав в себя два города из четырех, на которые она претендовала, был провозглашен 24 октября 1924 года.

Как итог можно сказать, что развитие кыргызского национализма в первые годы советского периода не было прямолинейным процессом. Кыргызский национализм в эти годы имеет разное содержание в зависимости от социально-политических условий отдельного периода. Если в 1922 году с помощью казахской элиты она старается создать административно-территориальную область, то в 1924 году уже заметен отход от казахов, стремление создать автономию собственными силами. И в этот раз не только автономию, а экономически более способную государственную единицу.